

「む」「ん」の文字遣をめぐる

山内洋一郎

目次

- 一、「む」「ん」の問題点
- 二、古本説話集の状況(1)
- 三、古本説話集の状況(2)
- 四、藤原定家の表記
- 五、「む」「ん」使用の概観

一 「む」「ん」の問題点

梅沢本『古本説話集』には、音節 *mu* を表記すると思われる仮名に「む」と「ず」(以下では「無」を用いる)とがある。前者を多く後者を僅かに使用しているところから、音韻は同じで、後者の使用に書写上の配慮などの音韻以外の要素が働いたもののように思われる。

また、音韻 *n* を表記すると思われる仮名に「ん」があり、「む」も併せて用いられている。双方とも多量の用例があり、「無」も僅かながら混じる。梅沢本の四筆の間に、これらのどれを主用とし何を併用するかに相違があり、仮名に音韻的環境による使い分けが見えないので、これも文字遣の問題と見るべきであろう。

それぞれの音韻内としては文字遣の問題であるが、*/mu/*/*u/*/*u/* 双方に同じ仮名「む」「無」「ん」が用いられるために、

仮名の方からは音韻との対応の方が問題になり、梅沢本の四筆それぞれも表記態度の異同をきたしている。また、古典仮名遣で「む」と書くものの一部（例えば、助動詞「らむ」）がその発音の変質につれて「ん」で書く傾向が増大し、如何に書くべきかの問題が生じる。これ即ち、「お・を・ほ」などと同じく仮名遣の問題といえよう。

片仮名「ン」は「ム」と字源を異にし、発生から一般化への過程も、音韻変化との関連も、一往は論じられている。これに対し、平仮名「ん」は「無」の異体字「无」の草体化に源を発し、「毛」と交錯しつつ、いつしか「む」と別個の仮名として存在するようになる。この変化過程は緩やかで把握しがたい。それで、仮名写本の翻刻に当たり、活字の「む」「ん」いずれを採るか迷うことになり、統一されていない。

以上述べたように、仮名「む」「無」「ん」をめぐる問題は複雑であつて、文字遣と仮名遣とが混然としており、音韻史が濃厚に関係し、翻字論としても重要な一角を占めるであろう。全体的考察の前に、まずは資料の表記の実態調査から始めよう。梅沢本『古本説話集』は書写者未詳ながら鎌倉中期の写し、四筆で、比較するのに好都合である。その資料性については説明を省略する。

二 古本説話集の状況（一）

「む」「無」「ん」三種の仮名の使用度数をその表す音節の言語的環境と梅沢本書写四筆とで分析したのが次表である。語頭は a b c、語中は d f、語尾は e g h である。配列を位置の違いにしなかつたのは、分布の様態を重視したからである。但し、e には二段活用連体形「―むる」2、已然形「―むれ」1 を含み、g に助動詞「むず」32 を含み、共に語末ではないが、状況の解釈には支障がない。

ここでまず、自立語の語中の「む」音節が僅か「寒し」のみであること、同じく語末のものが名詞などになくマ行動

「怒」などは、「む」aくeと同じく基本字体1に補助字体1を用い、しかもC筆に補助字体がないという共通点がある。範囲を拡げても同様の構造は「あ」以下の過半の字体に認められるもので、「む」にも同じ構造を確認できるわけである。さて、aの該当語彙は次のようである。複合語下位成分の場合もここに収める。表記上単独語との差異が認められないからで、語源意識から発音上も明瞭にもとの形を保持していたのであろう。

むかし、(今は)むかし。むかばき。むかはる。むかひ、むかふ、^{四段、下二段、}むかへ。むく^{四段、下}。
むくい。むこ。むし。むしろ、むしろごも。むすめ、(ひとり)むすめ。むせかへる。むつかし。むつかる。むなぐ
るま。むなし。むねと。(すぎ)むら、^{二、}三^三むら。むらかみ。むらさき、むらさきしぎぶ。むらすずめ。むろま
ち。(北、中、西、東)むろ。

「かたむく」は複合語としてaに含めてもよいが、b音との交替が他資料に見えることを考えて、dに収めた。
b「むま」の類、所謂語頭撥音の例は左の通りである。

むま、(かは)むま、(はた)むま、むまのとき。むまし。むまる。

語種として3語、「ま」の前部音のみである。右3語の「う」表記例は本書になく、他資料で「む」となること多い。「梅」「埋もる」なども、本書にはどちらの表記例もない。「海」「産む」などは「う」であって、狭母音音節の前では他資料にも「む」はないものである。但し、

うゝくとうめきけれども(巻上第18、55・7)以下引用には『古本説話集総索引』本文篇のページ・行を用いる。

とある動詞「うめく」は『今昔物語集』巻31 15語などに「ムメク」があるので、「むめきけれども」とあっても良さそうに見えるが、この動詞は口籠もる歎き声に「めく」の付いたもので、その歎声を直上に「うゝくと」と表現している以上、下に「うめき」とあるのはむしろ当然であろう。

これら語頭濁音の音価は、容易には断言を許さない問題があるが、巨視的には、万葉時代のuから平安時代にmへ、

そして中世末以後はuへと推移したと見てよいのではなからうか。キリシタン資料で<と表記されても実際には鼻音を残したよう⁽³⁾で、それ以前のmの強さを思わせるが、訓点資料・古辞書など片仮名資料での様相と平仮名資料のとは、一様でなく、uへの移行の時期・過程は詳しくはわからない。平仮名の世界では表記が伝統的になりやすく、『古本説話集』のb「むま」の類が「む」表記なのは、音価に拠りながら一種の仮名遣でもあったかと思われる。

c 字音語語頭は「無下」^{むげ}「無礼」^{むらい} 2語でどちらも仮名書きである。d和語自立語語中の例については既に触れた。

e マ行動詞語尾に語末でない二段活用連体形・已然形例を含むことも既に述べた。「やむごとなし」は、『源氏物語』の古写本などに「やうごとなし」「やごとなし」の形をそのまま見受けるように、熟合してウ音便乃至撥音便になっている可能性が高い。本書の三例(C筆1、D筆2)は全て「む」なのでeに収めた。撥音便と見てfに収めても良さそうに一見見えるが、f音便の「む」表記は、後に述べるごとく、特別の条件の場合が多く、これに収めるのは妥当でない。音便の意識よりは語源に沿って「やむ」とした面が強いかと思われる。やはりeに収めておくのが妥当であろう。これも表記が有識者の習慣として定まっていたのではあるまいか。

次にa～eの中の「無」表記、といってもaにのみであるが、これを検討してみよう。その7例は、「むかし」1例、「いまはむかし」6例である。その一つの模写を挙げる。

本資料に「昔」15、「今は昔」70という多数の例があるが、その「かし」の部分は全て「可之」の仮名で、右に見るように細い字体である。それ故「む」には大ぶりで密な字形が望ましい。「いまは」も「は」に「ハ・は・え」などの異体を用いているが、どれも疎な字形なので、疎・密・疎の字配りとなる。「む」は比較的大きい字形であるけれども、「無」を用いることがこの連綿に核のできた安定感を与えるのである。即ち、「無」は書写上の選択であり、避板法の意味も加

わつていたのであろう。

三 古本説話集の状況(2)

前表の四筆A、B、C、Dのそれぞれ内部に於いて、f音便、g助詞助動詞、h字音語韻尾の三種の仮名の使用傾向が似通っている。このf、g、hの音価が/n/、現代語の「ん」に相当する音だからだろうと容易に推測される。しかし、四筆の傾向は一様でなく、A、B、C、Dの三種に分けられるような相違である。この点を少し分析してみたい。

最初に配字上の字体選択の見えることを述べておく。C筆は「ん」表記147に対し、「む」は僅か13である。調べてみると、音便3例のうち2例、助詞助動詞3例のうち2例、字音語韻尾7例のうち4例、計8例までこの音節が行頭に配された場合なのである。

だうをたてゝあ「むぢし給へり。(133・5)へ「は改行の所、以下同じ。

「安置」である。「安」は舌内鼻音なので「む」表記の理由は原音に求められない。他の7例を挙げると、

なんゑ「むだう(南田堂)(124・9)	ひ「むがしさま(東方)(137・8)	ね「むじて(念)(150・6)	たび
たるな「むめり(152・7)	きたら「むに(160・8)	おはしまさ「むず(164・4)	びさも「むにも(毗沙門)(170・10)

C筆で残り「む」表記は、音便「かむのしなのそうぼう」(上階ノ僧房)(124・10)、助動詞「たのみたてまつりたらむばかりに」(151・7)、字音語韻尾「そむせうだらに」(尊勝陀羅尼)(140・4)、「けんどもむ」(慳貧)(173・7)、「ふびむ」(不便)(185・9)の5例である。このうち「けんどもむ」は「けん」に対して、「どもむ」と異字体を選んだものと解される。他4例に明瞭な書写上の条件が見出せないが、147例もの「ん」表記に対しての4例なので、C筆は/n/に対して「ん」を用いるという態度で一貫していると言つてよいであらう。

A筆の字音語韻尾の「む」19に対する「ん」1に注目しよう。行頭の例である。

伊勢大輔の御しそ「んは (84・7)

A筆で行頭の/n/をどう表記しているかを見るに、3例あり、全て「ん」なのである。

御らむぜ「ん (48・1)

おもていぬら「ん (14・3)

即ち、A筆では「ん」を行頭に書くのに抵抗がないばかりか、むしろ行頭に選んでいる、というC筆とは逆の姿が見える。A筆では「連・気・古」などの仮名の垂直線部分の起筆を頭高に打ち込む癖があり、同趣の字形になる「ん」も自然なのであろう。

B筆、字音語韻尾「む」18に対する「ん」3例は全て「寢殿」を「志むてん」としたものである。一語の中の二度の鼻音使用のため「―む―ん」という避板法を用いたものと解することができよう。「む」「ん」に関しての行頭の避板法はB筆に見られない。

D筆のh7例の中にも一語の中に二度撥音のある場合がある。しかし、基本字形が「ん」なので、「―ん―む」というB筆の逆になる。

げんしむ僧都(源信) (272・3)

せんまむごく(千万石) (212・2)

他の5例には条件を見出せない。

以上、書写上の条件による仮名字体選択の存在を明らかにした。行頭や一語中の避板法は、筆者の基本字形使用の個性と呼応し、これも個性的様相が見られた。『古本説話集』の如き寄合書きでは全体を一括しての表記論がむづかしいことが判明する。

さて、右の特例を除外して数表を再び見るならば、四筆のそれぞれの基本字形への傾斜と、四筆間の異同が一段と著しく見えてくるであろう。

次に f h の各項について検討してみよう。
f 音便。

動詞連用形撥音便の例がなく、ラ変系の連体形に「なり」「めり」の付く場合の例がある。名詞などの音便もあるので、これらを音便化の前の音により分けて例示する。

第二表

み——かんだちめ。かんづけ。かんのし な。きんだち。をんな——ばら——	×は「あなり」などの無表記。			
	1	2	2	2
む——なんぢ。ひんがし。 も——ねんごろ。	2	1	1	1
に——なんぞ。なんど（助詞）。	2	2	2	2
り——かもんのすけ。	1	1	1	1
る——たんなり。なんめり。等	1	1	1	1
転音——びんづら。まんどころや。	3	7	1	1

原音からは前三種が「む・無」、他は「ん」の期待されるところである。しかし、各筆はその別を示さず、またそれぞれに状況が異なる。A筆の「かもんのすけ」の「む」は「ん」を期待するなら誤用になるが、A筆が撥音便を「む」表記する態度であったとすればこれで良いはずである。

この梅沢本書写の鎌倉中期に、漢字音に詳通した人々とその種の資料は別として、撥音の m n の別があったとは思わ

れず、表記は書写者の個人的態度に負うところが大きいといえよう。その態度も撥音はこう書こうという大まかな習慣であつて、個人の中でも完全には一貫していないし、書写上の条件がそれに優先することもあつたわけである。

なお、音便の音価は、原音との関係よりも後続子音との同化の方が強く働くとも考えられるが、「両唇音「めり」に続く場合を見ても各筆で様子が異なり、この観点は重要ではない。

g 助詞助動詞

f hで各筆が「む」「ん」のどちらかに偏向するのに対し、gでは似而非な様相が見える。各筆の使用比率を「む・無」対「ん」の形で示すと次のようになる。

む・無	A 60	B 84	C 1	D 38	(%)
ん	40	16	99	62	

「む」偏重のBから、B—A—D—Cの順となる。Cの「む」3例のうち2例は行頭なので残るは僅か1という「ん」偏重である。この各筆の様相は、これら助詞助動詞群の文字遣が鎌倉中期には一定していなかった、これもまた書写者の個人的態度に委ねられていたということを意味するであろう。それは、自明のことながら、音便や字音語韻尾の、音声の性質の濃いものと異なり、元来Eと発音され、「む」で表記されていた上に、動詞活用語尾に近く意味をも担っていたからである。ただそれが、独立性に乏しい辞であるところに、発音も変化し易く、表記の流動をも許容しているのである。

第三表に語別に表記を一覧した。「らむ」が「ん」表記に偏っているのが目をひく。「らん」は本書では全て終止法（連体形も係結び終止）である。これが何ほどの条件になつていようが、「む」「けむ」の終止法も同様かというところ、その傾向は見え、終止法（書写での終筆部分）が全般の条件とはなっていない。「らむ」が「らん」と書かれることが多いという印象をここで確認するに止める。

第三表

計	語						筆者		
	む	むず	けむ	らむ	なむ 〈係助〉	なむ 〈終助〉			
30			4	4	1	21	A		
12			1	3		5			
28			1	1	9	16			
46			9	2	3	32	B		
6			4		2				
10			4	2	1	3			
3						1	C		
0						2			
79			5	2	4	8	60		
57	1		5		2	7	42	D	
8			1		3	1	3		
105	1		3	11		14	76		
136	1		18	2	9	9	97	計	
26			1	8		8	1		
222	1		1	13	24	6	22		
384	1	1	2	39	26	23	32	260	総計

h 字音語韻尾

第一表の数値から既述の避板法による異例を除くとき、字音語韻尾の表記形は、四筆で次のようになる。

A 19 | 0 B 18 | 0 C 2 | 55 D 5 | 54 (「む」「ん」)

ここには「む」を用いる A・B、「ん」の C・D の二群を認めることができる。和歌説話で王朝情趣の濃い上巻の書写に「む」が用いられると意味づけをしうるようであるが、いかがであろうか。筆者の個性を第一義とすべきと思われるが、何ほどの関連はありそうに思われる。

表記態度が各筆が単一であるので、字音語韻尾の唇内、舌内の違いをとり上げるに及ばないことになる。そこで、次に語彙を列挙し、それ以上の分析は行わない。本資料での仮名遣をふり仮名で示すことにする。

安置。姪欲。延喜。縁。結縁。観音。閑院。感ず。勘当。観音。剣。間。験。慳貧。元服。源信。隆源。紺。金堂。

「む」「ん」の文字遣をめぐって

和琴。懺悔。信ず。信貴。源信。寢殿。親王。真如。真如。護身。誦ず。神泉。御前。千万石。宣旨。前司。前裁。筑前。越前。越前。一善。損ず。尊勝。子孫。子孫。丹後。一段。天帝尺。吉祥天。寢殿。慳貧。男女。南円堂。徳人。任。念す。念す。判す。判す。般若。涅槃。便なし。不便。方便。辺。辺。変化。盆。千万石。対面。衛門。左衛門。大門。中門。毗沙門。学問。名聞。聴聞。文字。文珠。御覽。御覽。櫛子。命蓮。小院。小院。須陀洹果。南円堂。

字音語にも「あほふ(安法)」「ふび(不便)」「こゐ(小院)」「ねぶつ(念仏)」「さうじ(精進)」5例の韻尾無表記があるが、個別に韻尾のない音形になっていた疑いもあるので、今の問題とはしない。

『古本説話集』の「む・無・ん」の仮名文字遣を検討してきた。四筆の共通性としては、

○「無」は「む」の補助字形である。

○「无」より出てもとmnの音を表した「ん」は、mの音を示すのに用いられていない。

この鎌倉中期として当然の二点であり、

○nの音を示す字音語韻尾・音便では、筆者により「む」「ん」どちらかを基本字形と定められていた。

○助詞助動詞の「む」部分については、基本字形を明瞭に定めた筆もあれば、傾向を持って両用する筆もある。

○字音語韻尾・音便・助詞助動詞「む」部分について、「む」「ん」の一つが基本字形であれば、他を補助字形とする。

この三点が筆者の態度とからんだ問題点となる。

前二条からは「む」と「ん」は別個の文字概念と言えそうであるが、後三条ではその境界はあいまいである。個人の選択の範囲内にあるならば、「ん」はまだ十分には独立していないということになるが、「ん」の用法としては限定されているのである。

四 藤原定家の表記

仮名遣に自己の確固たる見解を持っていた藤原定家は、文字遣についてもその如くであった。定家書写本について詳細な仮名字体数表を發表し、分析を加えた植喜代子氏⁽⁴⁾により我々は具体的に知ることができる。「む」「ん」の問題に関して藤原定家の態度如何を知ることが、重要であるので、少しく考えてみたい。植氏の数表より必要部分を摘記する。

第四表

定家本行末	定家本行頭	定家本総計	天福本伊勢物語	御物本更級日記	伊達本近代秀歌	伊達本古今集	定家本土左日記	青谿書屋本土左日記	資料	
									字体	仮名
245	153	1338	302	281	32	637	86	25	む	ん
6	5	12	4	2	0	6	0	0	無	ん
0	0	0	0	0	0	0	0	34		
76	0	298	159	29	16	28	66	100	ん	ん

表中の「む」の中の「ん」字体は青谿書屋本のために必要となつたもので、定家本としては意義がない。これを除いて考えてみる。

「む」「ん」の文字遣をめぐって

音節「む」について基本字体「む」に補助字体「無」を僅かに混じている。行頭の「無」5例中4、行中1、及び行末6例中の5例がその右傍に先に「む」のあった場合の避板法である(植氏表の指摘を訂正)。従って、定家は「む」と「ん」を専用していたとわかるのである。

しかし、この「ん」は如何なる場合であったかと、本稿の分析の方法からこの表を見ると、気になることがある。使用比率の大きい差が見られるのである。

土左日記 古今集 近代秀歌 更級日記 伊勢物語

む・無	57	95	67	91	66	%
ん	43	5	33	9	34	

第五表

音節の位置	資料		注
	仮名字体	土佐日記	
a 和語自立語語頭 「むま」の類	11	24	「無すめ」は避板法。
b 「むま」の類	2	9	「無下に」「無期に」
c 字音語語頭	2	50	
d 和語自立語語中	9	2	「むさし」。「そむく」も含む。
e マ行動詞語尾	20	2	「やむことなし」を含む。「たの無」は避板法。
f 音便	7	7	「ふむとき」「よむべ」をむな「かむざき」「ひむがし」「おほん」など。
g 助詞助動詞	27	16	
h 字音語韻尾	3	176	
計	80	0	
	66	50	
	268	2	
	30	23	

『土左日記』『近代秀歌』『伊勢物語』の三書と『古今集』『更級日記』の二書でははっきりと比率が異なる。散文・韻文の違いではないので、表記対象による分析が必要となる。次表は、『土左日記』と『更級日記』とを二種の代表として分析したものである。

定家は『更級日記』書写に当っては、助詞助動詞の類全てを「む」で通した。しかし、『土左日記』では「ん」表記を多くする。係助詞「なむ」は初め2例の「なむ」の後は14例全て「なん」とし、終助詞「なむ」は4例とも「なん」、助動詞「らむ」6例も全て「らん」とする。だが、「けむ」は「けむ」3、「けん」2。「む」は「む」22、「ん」24の比である。語による違いを意識したか、連綿体としての筆法のためなのか、分析はそこまで及んでいない。

定家は時に全て「む」でという方針を採り、時に一般の表記に近い「ん」多用の方法へと揺れたのであろうか。定家本のすべてを調査してみるのも興味あることである。書写底本との関係もあろうが、これほどに大きい揺れの存することは、定家の書写には想像できないことであつた。

五 「む」「ん」使用の概観

「む」「ん」をめぐる仮名の状況について鎌倉時代の一端を見てきたのであるが、文学に携わってきた人々の文学作品の書写に見える状況をもつて一般状況というわけにはいかない。平安末に漸く多くなった書状資料、文学以外の、親鸞とか日蓮とかの数多い資料、或いは庶民の地券類を含めた古文書類、これらについて、今詳しくは調査していないが、「む」「ん」の音韻を反映した仮名としての弁別ははっきりしてきている。仮名「ん」の独立が見られるのである。「ん」が特殊音素表記であるだけに、その音素の成立を追って成つたものであり、それが、音便・字音語韻尾、そして助詞助動詞「む」の類の音変化に伴つたものであることは言うまでもない。

ここで、「无」から「ん」へ動いたこの字体と「む」の類の表記との関連を中心に、平安初期からの流れを概観してみ

たい。

草仮名資料の最初に位置づけられる藤原有年申文（讃岐国司解、貞観九年八四七）に三箇所〔む〕がある。（以下、本稿で対象とする範囲―第一表―を〔む〕とする。无とんは字形の近似により使い分ける。）

…これはなせ无にか官にましたまは無。

…いとよから無。

助動詞「む」を「无」で記し、文書の末尾に「無」を用いる。後世にも末尾に「無」で字画の多い重みのある止め方をすることが見受けられる。

因幡国司解仮名消息には係助詞「なむ」が三例ありどれも「なん」である。『集古浪華帖』に模刻の小野道風書状に、二例の助動詞「らむ」が「ら无・らん」とあり、第八紙の「あやしくなも侍れ」は「なむ」と翻字することもあるが、存疑である。

承平八年（九三八）の●然生誕書付に「生まる」を

ひつしの□のときにん、まる

とあり、語頭発音の表記が見え、藤原定家臨模の『土左日記』紀貫之筆に見える

ん、まれしもかへらぬ

と共に、早い例で注意される。この臨模部分には「かくなん」「とくやりてん」の二例も見える。

このように初期草仮名資料に助詞助動詞部分が見え、「无」で書かれる傾向が見えている。後の「ん」成立への道筋を思わせるところである。同じく貫之関係でも、自家集切では「武」「舞」がこれに加えられ、和歌の書写での用字法の違いが考えられ、初期草仮名資料に加えられる継色紙は「らん」「羅ん」の「ん」も見える共に「気牟」「那舞」「難無」「無」もあって、多彩である。継色紙は一面に一首或いは半首を散らし書きにし、時に「む」一字が一行をなすこともあり、

表記は実用的資料とは同一に論ぜられない。このことは寸松庵色紙にも言いうることであり、また和歌一首の一行書きもある古筆切でも、やはり言えることである。所謂古筆の美的世界では多様性を保っているようである。

実用的資料で原本のあるものに仮名書状がある。久曾神昇著『平安時代 仮名書状の研究』（風間書房、昭和43）所収の写真によって調べてみる。

まず平安中期の北山抄紙背書状では7例のうち「む」2、「ん」5である。「む」は動詞活用語尾「せむれ」と助動詞「はべりけむ」で、「ん」は「ごらん（御覧）」3例に「けん」及び係助詞「なん」である。同紙背の源憲定（？）書状にも係助詞「なん」が2例見える。

康保三年^{九六六}文書を含む虚空蔵菩薩念誦次第紙背文書では、仮名書状の中に19の「む」があり、接頭語「おほん」6、係助詞「なん」10、助動詞「ん」3、となっている。全て「ん」字体であるのは、漢文体の藤原清正書状中の助動詞「む」の「…令行侍らむや、乗物不諧侍なむ」という2例の「む」と対照的である。

応徳二年^{一〇八五}文書を含む不空三蔵表集紙背文書では、仮名書状の中に56の「む」が見える。a和語自立語語頭は4例で「んつかし」2、「んつかる」、この二種は「ん」を用い、「むつ（六）」がある。字音語語頭に「んけ（無下）」が1例、和語自立語語中に「浴す^{あぶ}」を3例とも「ん」で記す。マ行動詞語尾に「つゝしむ」1例がある。音便に「御^{おほん}」を5例とも「ん」表記し、字音語韻尾「解文^{もん}」1は「ん」、「林家^{りん}」は「む」「ん」各1である。助詞助動詞では次のようになっている。

「む」む11 「むず」む1 「らむ」む2 係助詞「なむ」む0
ん19 　　ん0 　　ん0 　　ん6

この資料で「難かし」「憤かる」「無下」などにも「ん」が用いられており、「ん」を「む」の一体とすべきことがわかる。これら「ん」を「む」と翻字することは正当といえよう。

灌頂阿闍梨宣旨官牒紙背文書、諸仏菩薩釈義紙背文書の仮名書状は右と同時期のもの、同一筆者もいるのでは詳細は省略する。

院政も末期になると、「む」「ん」の別がはつきりしてくる。「ん」の用法が、字音語韻尾と助詞助動詞に限られてくる(音便例は不明)。承安五年(一二七四)頃の書状の文泉抄紙背文書、平清盛、平経盛、西光、西行、俊成などの書状で

『平安時代 仮名書状の研究』にあるものを一括して述べると、「む」は

副詞「むべく」平経盛、名詞「むすび一句」西行、字音「いむ(韻)」西行、助動詞「む」文泉抄 乙丙 3例

「ん」は

字音「もんぞ(文書)」「げざん(見参)」「れん花ぜうるん(蓮花乗院)」「みせん(宣)」以上三、位局、「くんじ(董)」「しんぜ(信)」

文泉抄、「あんらくず院(安楽寿院)」「げういんそうづ(堯胤僧部)」平法盛、「るん(院)」建礼門院、「びん(便)」西光

助動詞「む」「むず」「らむ」「けむ」「やらん」など「ん」表記多数。

以上の概観から言えることは、書状においては

○「む」「ん」二字体以外は見当らない。

○「ん」字体が自立語語頭にも用いられていたが、後にはなくなる。

○「ん」が字音語韻尾・助詞助動詞などに偏って用いられる傾向が、時代を下るにつれて多くなる。

これらは常識的推測と大きく変わるものではない。

「ん」が助詞助動詞に多く用いられるのは、連綿体の下部に当るため、上からの筆の続きが「ん」ではなめらかであり、また右から左へ筆が流れて続き書きの締め括りとしても安定性がある、といった書写上の条件が大きく関与している。勿論筆の書き終りの強調的停止には「舞」「無」などが用いられることも多いが、一般には「ん」で十分なのである。しかし、これは「ん」が「む」から離れてゆく説明にはならない。音韻としての自立との関連が大きいはずである。

助詞助動詞の場合についてみよう。

助動詞「む」の音変化については、藤原公任の『北山抄』の記述が早いものとして知られている。⁽⁵⁾

諸杖共起、侍從相分列立東西、立定大臣宣侍座、共称唯再拜

この「侍座」に「之支伊」と注があり、「敷き居む」、即ち「着座するがよろしい。」と、命令の婉曲表現に「む」を用いたものである。藤原道長『御堂閔白記』長和三年（二〇一四）十一月十六日条にもこの句が「余仰去^{伊之幾}」と記されていることも報告されており、公卿たちの儀式の座における慣用句であったことがわかる。そして「伊」の字音が「キンⁱⁿ」であるので、助動詞「む」がnになっていたことが判明するわけである。

「む」の「ン」表記は、早く春日政治博士により、明算加点の高野山龍光院蔵『妙法蓮花経』の⁽⁶⁾
^{ホロビ}喪と

が報告され、遠藤嘉基博士は昭和十九年に再確認したと記される。また、築島裕博士は、『御堂閔白記』『北山抄』の例に続いて、康平四年（一〇六一）加点の知恩院蔵『成唯識論述記』につき、

「名て為善トヒヒナン」などの例がある。

とされる。ただし、大勢は後れ、片仮名資料、訓点資料では、m nの区別は原則的に存在し、鎌倉初期になって区別がある中に違例が見え、中期に混同が目立ってくる。違例は助詞「ナムド」、助動詞「ム」等に偏っている。これらの様子は小林芳規博士『中世仮名文の国語史的研究』⁽⁹⁾に詳しい。「ウ」表記例が院政期に出現することも考慮に入れるならば、藤原道長の時期、平安中期は「む」の撥音化し始めた時期なのであろう。恐らく他の助動詞「けむ」「らむ」も助詞の「なむ」も同様であっただろう（両語とも鎌倉時代にケウ・ラウの形をとり、消失してゆく）。

『む』の仮名として「武・牟・無」などと同じ並びであった「无（ん）」が、字形の簡明、書写の容易、字体の安定性などから実用的文書に多用され（古筆資料でも使用頻度の高さは言うまでもない）、助詞助動詞の使用頻度の高さも預って、

「む」「ん」の文字遣をめぐって

助詞助動詞の表記仮名の色彩を帯び、音の変質を反映して/n/の専用仮名となつてゆく。音節「む」は語頭か動詞活用語尾にその大部分が位置し、明瞭な音を保つため、その位置の表記に適した「む」がその専用仮名に傾いてゆく。「ん」の仮名としての自立は、不空三藏表集紙背の藤原為房妻消息のように、それが語頭に用いられている間は、認められな
いであろう。

院政期から鎌倉初期にかけて、仮名資料も多種になつてくる。美的観点の濃い古筆の文字資料と、たどたどしい筆致の地券等の古文書類を両端に、さまざまな散文資料が中間に存する。実用的資料では「む」「ん」の分化は早くより見られるが、筆者の知的水準の高低、書写資料の性質による文字遣の必要度の多寡などによつて、文字上の多様性はさまざまになり、同一人でも同一態度になつていない。その点は日本語音節及び文字の全般に言いうることであるが、「む」「ん」をめぐつて調査してみると、この多様化が実感されてくる。

本稿はこの問題につき、梅沢本『古本説話集』の実態を中心に、そこに至る過程を少しでも明らかにしようと試みたものである。

注

- (1) 小松英雄氏の用語・基本字形・補助字形による。「藤原定家の文字づかい」を「お」の中和を中心として(『言語生活』一九七四年五月)
- (2) 「古本説話集の平仮名字体」(『鎌倉時代語研究』第二輯)
- (3) 森田武「日本語・音韻の歴史 中世」(『国文学解釈と鑑賞』昭和三十五年九月)
- (4) 「藤原定家の変体仮名の用法について」(『国文学攷82号』、昭和五十四年)
- (5) 中田祝夫「平安時代の国語」(『日本語の歴史』至文堂、昭和三十二年)
- (6) 「高野山にて観たる古点本一二」(『文学研究』第七輯、昭和九年)、『古訓点の研究』所収
- (7) 『訓点語と訓点資料の研究』第三章(三)(中央図書出版社、昭和二十七年)

(8) 『平安時代語新論』第三編第三章(東京大学出版会、一九六九年)

(9) 『広島大学文学部紀要』一九七一年三月

付記 本稿全般、ことに訓点資料との関連につき、小林芳規博士の御教示に預った。記して感謝申し上げます。